

NHK「オウム真理教」取材協力 暫定報告その1

西阪研究室 NHK プロジェクトグループ
 (西阪仰, 早野薫, 小宮友根, 黒嶋智美, 岩田夏穂)

2012年4月8日

以下の暫定報告は、1989年4月7日の出家信徒への説法、1989年7月27日の選挙に出ることに関する「意思決定」、1988年11月10日のDNA増殖に関する議論と教団幹部への説法の一部を、詳細に書き起こしたうえで、オウム真理教教祖麻原彰晃と信徒たちとのやりとりの構造の一部について、気がついたことをまとめたものです。

きわめて暫定的なものですが、それでもいくつか知見としてまとまりつつあるものを、提示したいと思います。私たちの研究がもつづく「会話分析 (Conversation Analysis)」と呼ばれる技法は、人びとの、言葉を用いたやりとりの構造を明らかにしようとするものです。その知見も、そのやりとりのすべての参加者たちによって、いわば協働で作りに上げられる構造に関するものです。

また、その構造を作り出すために彼らが用いているやり方は、すべて私たちが日常において用いているものと、本質的にはかわりありません。

1. 説得のやりとり

1989年4月7日の説法は、「殺人」を正当化する説法として一部で知られているようですが、それは、ある特定の構造を持っています。その構造は、おおまかには、次のようにまとめることができます。

- 1) 麻原が問を投げかける。
- 2) 信徒たちが、その問への答を述べる。
- 3) 麻原が正解を解説する。

このようなまとめ方をすると、学校における教師と生徒のやりとりと似ているようにも思えます。が、実際には、やや異なる形をとっています。

1-1. 麻原の問いかけ

第一に、麻原の問いかけは、考えもしくは意見を求めるという形をとっています。いくつか引用してみましょう。

- (1) [APR7 1989: 01]
 01 麻原: tp 例えば ここに (1.2) 真↓理を否定す↑る (0.2) <正しく>ない
 02 (.) ↓人がいたとし↓↓よう。と。
 03 (0.6)

04 麻原: tp .h この人に対↓しては: (.) 私たちはどのような道が (.)
 05 あ↓るだろう↓かね:↑: (.) 言ってごらん?

ここでは、5行目で、「だろうかね」という言い方により、あくまでも可能性のリストアップをうながしているように見えます。また、釈迦牟尼の前生譚を語ったあと、麻原は、いくつか問いかけを行いません。これは、前生譚 (jataka) からの引用なので、明確に答のある問と言えるでしょう。[しかし、麻原の問いかけ方は、やはり考えもしくは意見を求めるという形をとります.]

(2a) [APR7 1989: 03: 18行目]

麻原: はい (0.6) 仏陀釈迦牟尼はどうしたと お↓もう↓か↑:

(2b) [APR7 1989: 03: 23行目]

麻原: では ↑きみたちだったらどうする↓か かんがえてみよう

(2a)では、「思うか」と、「考え」を求めています。(2b)では、むしろ「意見」を求めていると言えるでしょう。いずれの場合も、「私たちはどのような道をとるか」「仏陀釈迦牟尼はどうしたか」と問うこともできたでしょう。

1-2. 信徒の答

一方、信徒たちの答え方は、しばしば、あたかも正解を言い当てるかのような答え方をしています。

(3) [APR7 1989: 02]

信徒: >あの< (.) せん生の書かれた本↓を: あの:: 読ませてあげる

(4) [APR7 1989: 05]

AAA: 脅↓す

(5) [APR7 1989: 07]

瀬田: (え:#:#) ポアさせてあげ↓る

いずれも、いわゆる常体(「である」調)で、しかも「言い切り」表現になっています。いみじくも「尊師」たる者に向かって語るのに、なぜ常体で言い切るのでしょうか。それは、「正解」の候補の提示として行なわれているからでしょう(クイズ番組の回答者の答え方を思い出してください)。

1-3. 信徒の答に対する麻原の応答

しかしながら、この「答」に対する「問いかけ者」(つまり、麻原)の応答のやり方が、ふたたび学校の教師と異なるようです[これが、学校でのやりとりとの、第二の相違点です]。学校の教師の場合、通常、「答」のあとその答に対する評価がなされると言われています。その場合、正解

であれば、「正解である」という評価がなされますが、一方、不正解ならば、「不正解である」とはっきり述べられることは、ほとんどありません。多くの場合、不正解のあと、明確な評価のないまま、次の答を求め、正解がでたところで、「問」と「答」のやりとりが終結します。

上に引用した(3)～(5)の「答」のうち、(5)は、とりあえず、正解に近いものであることが、あとで明らかになります。が、それに続くやりとりは、むしろ、あたかも「不正解」であるかのようです。

- (6) [APR7 1989: 07]
- 01 麻原: まわりの人↓に↑相談↓する(.)よしわかっ↓た: .h じゃあ
02 瀬田はどう↓だ
03 (1.0)
04 瀬田: はい
05 (1.8)
06 瀬田: (え:#:#) ポアさせてあげ↓る
07 麻原: tyn ポアさせてあげる↓か
08 瀬田: はい
09 麻原: ん::ん
10 (0.6)
11 麻原: では:: BBB大↓師は ↑どうする↓か

麻原は、7行目で瀬田の(6行目の)答をほぼ繰り返すことで、それを精確に聞いたことを実証するだけで、そのあと、9行目で「ん::ん」と、瀬田の答に対するいかなる評価的含意をも、あえて避けるかのような応答をします。そして、そのまま、11行目で「BBB大師」に意見を求めていきます。この点において、単に、正解を述べさせること、あるいは、そのことにより「教への理解」を実証させることが、このやりとりの目的ではないように見えます。

1-4. 麻原の「正解」解説

瀬田の答に続き、いくつか答が提示されたあと、麻原が「正解」の解説を始めます。この解説の組み立ても、学校の教師の場合と異なっています。

第一に、教室の場合と異なり、正解の解説は、正解のあとではなく、不正解のあとに行なわれます。上の瀬田の答のあと、何人かが答を出します。この解説の直前の(「ccc 大師」の)答に対しては、麻原はあえて問いかけることをしています。次のようなやりとりになっています。

- (7) [APR7 1989: 08]
- 01 CCC: 'と:: ↑もし できんだったら:, あの: ほう石を全部捨てます。
02 (1.2)
03 麻原: °h↓ん:::ん°
04 (2.2)
05 麻原: h↓ん:::ん
06 (3.2)
07 麻原: #h ん
08 (9.0)

- 09 麻原: TSK .hhhhhH (0.4) CCC大師:
 10 (0.2)
 11 CCC: はい,
 12 麻原: で↑きないんだったら どうする

麻原は、与えられた答（1行目）を「ん」と3度（3行目，5行目，6行目）受け止めたあと，最初に呼びかけを行ない（9行目），ついで，その答に関する質問を行ないます（12行目）．すでに自分に注目している者にあえて呼びかけることが，挑戦的な意味合いを持つことはおいておくとしても，12行目の質問は，「ccc 大師」の答への「反論」を含蓄するよう見えます．

このやりとりのあと，（音があまりよく拾われていないのですが）他の信徒から「ccc 大師」を支持する意見が出され，それに対する麻原の「反論」的質問があり，そのあと，麻原の解説が開始されます．次のとおりです．

(8) [APR7 1989: 09]

- 01 麻原: .khh だって::: 海の上だよ?:,
 02 (1.4)
 03 麻原: ふねが 沈んだら みんな死んじゃうよ?,
 04 (0.4)
 05 信徒: (そうなんですけど)
 06 (4.2)
 07 麻原: ね:,
 08 (?): nhn! ((咳払い))
 09 (3.2)
 10 麻原: .h ↑なぜ私が:, (0.2) いまこうゆう質問↑を:, いま君たちに
 11 してるかというのと:, .hhh 要するに: ひ↑とというのは:,
 12 .hhh それぞれ↑心↑というものを持っている↓と

10行目から11行目で，麻原は解説を始めますが，その解説は，自分が質問をした理由の説明という形で導入されています．これが，この解説の第二の特徴です．教室で教師は，おそらく，質問の理由を解説する必要はないでしょう．

これから長い解説が始まりますが，その後，11行目の「してるかというのと」に直接つながる表現は出てきません．が，その解説のなかで，その理由の一つは明らかになります．それは，この解説の第三の特徴にかかわっています．麻原は，ある信徒にまつわるエピソードをひとしきり語ったあと，次のように述べています．

(9) [APR7 1989: 12]

- 01 麻原: で これがしん理だ°と°.
 02 (0.4)
 03 麻原: .khh ↑そうすると↑ね,今あの: .hh いろんな答を聞いて
 04 感じることは:, (1.3) ↑真理に対しての割りきりがない↑な
 05 ↓と. .hhh それから自分の立場にたいして↑傲慢さがある↑な
 06 という気がする↑ね?,
 07 (1.4)

3行目から6行目で、麻原は、信徒たちの答[すなわち、信徒たちの考え・意見の提示]から、信徒たちの「心」の持ちようを分析しています。つまり、信徒たちの「答」は、問への答であると同時に、麻原に対して分析のための素材を提供するものであったことがわかります。しかも、信徒たちの「心」が否定的に評価されています(「真理に対して割りきりが無い」「傲慢さがある」)。麻原が、真理を単に(あのような質問などすることなしに)解説するだけでなく、問いかけを行なったのは、まさにこの「素材」を得るためであったこと、このことが明らかになります。

このように分析された信徒の「心」は、「不正解」の原因として位置付けられます。つまり、こんな心持だから正しい答が出せない。

また、(9)に引用した言い方が、具体的にどの答と特定することなく、信徒たちの答に一般的に言及する言い方(「いろんな」)である点にも注意したいと思います。このような言い方は、真理からまだ遠い「信徒」一般と、真理を語れる「尊師」とを差異化するでしょう。そしてこのことが、真理(「正解」)を語れる麻原がまさにこうして語る正解こそが、「正解」に他ならないものとして受け入れられていくための基盤になっているように思えます。

その点で、次のような言い方も特徴的でしょう。

(10) [APR7 1989: 12]

- 01 麻原: .hh これが:, タンドラの教えなんだよ。
 02 (1.0)
 03 麻原: ただ これは:, (0.3) 深遠でむずかしい
 04 (2.5)
 05 麻原: .th どうしても: .h その: u心のよわさが出ると:
 06 .hh そこまで断定的に↑ね? (.) 判断することは↑できない。と。
 07 (1.0)
 08 麻原: .thh ただ君たちがだよ?, .h 今:生で最終解脱を考えているん
 09 だったら:, .hh も↑つとも強い心の働きを持ちなさい。と。
 10 (0.2)

麻原は、3行目でタンドラの教えが「難しい」と語り、5~6行目でその理解の困難が「心の弱さ」に起因するものであることを、述べています。

信徒たちの心が弱いものであることが、かれらの「答」[すなわち、かれらの考え・意見の提示]において実証されるならば、麻原は、信徒たちと自らを差異化するとともに、その差異化された地位にもとづいて、自分の助言(8~10行目)を信徒たちに受け入れさせることができるでしょう。

だから、十分多くの「不正解」が提示されたところで、この解説は始められなければならなかったわけです。

1-4. まとめ

以上から注意すべきことが2つあります。

1) この麻原のやり方そのものには、なんら不思議なことはありません。それは、ごくごく普通のレトリックです。[それも、マインドコントロールの一部だったといえ、そうなのかもしれ

ません。しかし、そのように言ってしまつては、逆に、多くのものが取り逃がされてしまうように思います。そこには、明確な、誰にでも理解可能な手法が用いられています。麻原の一見、巧みなレトリックも、じつは、私たちが普段用いているものの（「巧みな」）組み合わせにすぎないと言えるでしょう。]

2) この麻原のレトリックは、麻原の問いかけから始まり、信徒の答を経て、その答が正解の解説に素材として取り込まれる過程のうちにあります。このやりとりの流れには、教室のやりとりと似た、しかし決定的な点で異なる構造がありました。この「やりとりそのものの」構造は、そのやりとりへの参加者みんなによって支えられています。そのかぎりでは、麻原のレトリック（「ポア」を正当化するだけでなく、「ポア」を信徒たちに受け入れさせるためのレトリック）も、信徒たちのやりとりへの積極的参加に依存していると言えるでしょう。

[注記：誤解のないよう、一言補いたい。ここで述べていることは、1) 麻原のレトリックが、麻原と信者たちのやりとりの構造に埋め込まれていること、2) そして、やりとりに構造があるならば、その構造は、必ず、やりとりに参加している全員の、まさにその参加の事実によって支えられていること、このことだけである。一連の事件に対する信者の責任については、ここからただちに特定の主張を引き出すことはできない。重要なことは、いかに麻原のレトリックが巧みであっても、麻原の一方的な意思だけでは（例えば、信者たちが自分たちの考えを出してくれなければ）、そのレトリックを実現することはできないということだ。（2012年6月9日）]